

学生1割、地域体験

「里親」支援でシンポ

滋賀医大

滋賀医科大学が2007年から進める「地域『里親』による医学生支援」事業の成果を報告するシンポジウムが26日、大津市におの浜1丁目のホテルピアザびわ湖であった。約80人が参加し、地域医療を担う医師や看護師を確保する方策を話し合った。

文科省が指定する同事業は、同大卒業生の医師や住民らに「里親」になってもらい、交流したり、地域の医療の現状について語り合ったりしながら、学生が地域に関心を持てるよう支援する。今年度で指定期間が終わることから、成果を共有する場としてシンポジウムを企画した。

同大はこれまでに全学生の

1割程度が事業に参加し「住民の生活を支える医療の現場を体験し、地域医療の役割を

理解し始めている」と報告。馬場忠雄学長は「全国の大学で地域枠が採り入れられているが、奨学金は返すから県外で就職したいという学生もいると聞く。地域と連携した地道な取り組みなしに地域医療は支えられない」。

出席した医療関係者からは「地域の人々の生活に触れてこそ求められる医療がわかる」「ノウハウを今後に生かすため、行政や大学、医療機関などが連携できる仕組みが必要だ」などの意見が出た。

2010年9月27日(月)

朝日新聞 掲載

記事掲載 許諾済

滋賀